孔孟の道貧ならず稲の花

古ぼけし油繪をかけ秋の蝶

倫理講話

赤き物少しは參れ蕃椒

かしこまる膝のあたりやそゞろ寒

教室

朝寒の顔を揃へし机かな

先生の疎髯を吹くや秋の風

植物園

本名は頓とわからず草の花

苦青く末枯るゝべきものもなし

物理室

南窓に寫眞を燒くや赤蜻蛉

暗室や心得たりときり〴〵す

化學室

化學とは花火を造る術ならん

玻璃瓶に糸瓜の水や二升程

動物室

剝製の鵙鳴かなくに晝淋し

魚も祭らず獺老いて秋の風

食堂

焚噲や闥を排して茸の飯

大食を上座に栗の飯黄なり

演說會

瓜西瓜富貴那ならぬはなかりけり

就中うましと思ふ柿と栗

擊劍會

稲妻の目にも留らぬ勝負哉

容赦なく瓢を叩く糸瓜かな

柔道試合

轉げし芋の鳥渡起き直る健氣さよ

靡けども芒を倒し能はざる

手帳の中より　九句　十月頃

さら〳〵と護謨の合羽に秋の雨

澁柿や長者と見えて岡の家

門前に琴彈く家や菊の寺

時雨るゝや足場朽ちたる堂の〔隅？〕

釣鐘をすかして見るや秋の海

菊に猫沈南蘋を招きけり

部屋住の棒使ひ居る月夜かな

叢中に雀の死骸を拾ひ得て之を白菊の下に葬る　一句

蛤とならざるをいたみ菊の露

神垣や紅葉を翳す巫女の袖

手帳の中より　六句　十二月

追分で引き剝がれたる寒かな

横顔の歌舞伎に似たる火鉢かな

炭團いけて雪隱詰の工夫哉

火燵して得たる將棋の詰手哉

御家人の安火を抱くや後風土記

自轉車を輪に乘る馬場の柳かな

月日不詳

決闘や町をはなれて星月夜

長女出生

安々と海鼠の如き子を生めり

明治三十二年頃

時雨ては化る文福茶釜かな

寒菊や京の茶を賣る夫婦もの

茶の會に客の揃はぬ時雨哉

山茶花や亭をめぐりて小道あり

茶の花や長屋も持ちて淨土寺

小春日や茶室を開き南向

水仙や髯たくはへて賣茶翁

明治三十三年

北千反畑に轉居して四句　四月

菜の花の隣もありて竹の垣

鶯も（後に）柳も青き住居かな

新しき疊に寐たり宵の春

春の雨鍋と釜とを運びけり

折釘に掛けし春著や五つ紋

七月四日

紫川の東上を送る

京に行かば寺に宿かれ時鳥

無心常覺涼靜坐自生風　原紫川のために

ふき通す涼しき風や腹の中

九月六日寺田寅彦宛の端書の中より

秋風の一人を吹くや海の上

日記の中より　渡歐　六句　九月—十一月

阿呆鳥熱き國へぞ參りける

稻妻の碎けて青し（後に）浪の花

雲の峰風なき海を渡りけり

赤き日の海に落込む暑かな

日は落ちて海の底より暑かな

空狹き都に住むや神無月

明治三十四年

日記の中より　倫敦　二月一日

朝 Dulwich に至り Picture Gallery を見る此邊に至ればさすがの英國も風流閑雅の趣なきにあらず

繪所を栗燒く人に尋ねけり

二月高濱虚子宛の手紙より

女皇の葬式は「ハイド」公園にて見物致候立派なものに候

白金に黄金に柩寒からず

屋根の上などに見物人が澤山居候

妙ですな

凩の下にゐろとも吹かぬなり

棺の來る時は流石に靜粛なり

凩や吹き靜まつて喪の車

熊の皮の帽を戴くは何と云ふ兵隊に

や

熊の皮の頭巾ゆゝしき警護かな

もう英國も厭になり候

吾妹子を夢みる春の夜となりぬ

當地の芝居は中々立派に候

滿堂の閣浮檀金や宵の春

或詩人の作を讀んで非常に嬉しかりし時

見付たる菫の花や夕明り

十一月三日於倫敦太良坊運座

礎に砂吹きあつる野分かな

角巾を吹き落し行く野分かな

近けば庄屋殿なり霧のあさ

（天長節）後天後土菊匂はざる處なし

栗を燒く伊太利人や道の傍

栗はねて失せけるを灰に求め得ず

十一月十日於倫敦太良坊運座

澁柿やにくき庄屋の門構

ほきとをる下駄の齒形や霜柱

月にうつる擬寶珠の色やとくる霜

茶の花や智識と見えて眉深し

茶の花や讀みさしてある楞伽經

明治三十五年

一月一日於倫敦太良坊運座

山賊の顔のみ明かき榾火かな

三月渡邊春溪宛の手紙の中より（倫敦）

句あるべくも花なき國に客となり

二月十六日村上霽月宛の端書の中より（倫敦）

花賣に寒し眞珠の耳飾

なつかしの紙衣もあらず行李の底

三階に獨り寐に行く寒かな

十二月一日高濱虚子宛の手紙の中より（倫敦）

倫敦にて子規の訃を聞きて

筒袖や秋の柩にしたがはず

手向くべき線香もなくて暮の秋

霧黄なる市に動くや影法師

きり〳〵すの昔を忍び歸るべし

招かざる薄に歸り來る人ぞ

明治三十六年

於一高俳句會　五月

落ちし雷を盥に伏せて鮓の石

六月　二句

引窓をからりと空の明け易き

ぬきんでゝ雜木の中や樓櫚の花

七月　二句

雲の峰雷を封じて聳えけり

船此日運河に入るや雲の峰

六月十七日井上微笑宛の手紙より

愚かければ獨りすゞしくおはします

無人島の天子とならば涼しかろ

短夜や夜討をかくるひまもなく

更衣同心衆の十手かな

ひとりきくや夏鶯の亂鳴

蝙蝠や一筋町の旅藝者

蝙蝠に近し小鍛冶が鎚の音

市の灯に美なる莓を見付たり

玻璃盤に露のしたゝる莓かな

能もなき教師とならんあら涼し

蚊帳青く涼しき顔にふきつける

更衣沂に浴すべき願あり

薔薇ちるや天似孫の詩見厭たり

明治三十七年

一月三日橋口貫宛自筆の繪端書に

人の上春を寫すや繪そら言

四月二十一日野間眞綱宛の手紙の中より

鳩鳴いて烟の如き春に入る

杳として桃花に入るや水の音

七月二十五日橋口貫宛の端書の中より

十錢で名畫を得たり時鳥

十一月六日橋口貫宛自筆の繪端書に

明月や杉に更けたる東大寺

明治三十八年

十二月十四日鈴木三重吉宛の手紙より

只寒し封を開けば影法師

明治三十九年

猫二匹ゐる繪端書に

寄りそへばねむりておはす春の雨

自著漾虛集を小宮氏に贈りて　五月

本來はちるべき芥子にまがきせり

元祿美人の繪端書に　五月二十七日

短冊に元祿の句や京の春

東洋城と大森より池上の邊を散歩　八句　十一月

祖師堂にひるの灯影や秋の雨

かきがらを屋根にわびしや秋の雨

暮れなんとしてほのかに蓼の花をふむ

品川　一句

青楼や欄のひまより春の海

渡殿の白木めでたし菊の花

釣鐘のうなる許りに野分かな

反橋の小さく見ゆる芙蓉かな

亂菊や土塀の窓の古簀垂

十二月佐藤紅綠宛の手紙の中より

鰒汁と知らで薦めし寐覺かな

十二月二十五日小宮豐隆のために『鶉籠』の見返しに

春を待つ下宿の人や書一卷

一月

御降になるらん旗の垂れ具合

隱れ住んで此御降や世に遠し

明治四十年

二月

打つ畠に小鳥の影の屢す
物いはぬ人と生れて打つ畠か

吾文をあつめて一冊とせる人の好意を謝して二句を題す　二月

長短の風になびくや花芒
月今宵もろ〳〵の影動きけり
（月天心（後に））

三月三十一日京都より小宮豐隆宛の手紙の中より　二句

春寒く（後に）社頭に鶴を夢みけり

布さらす積わたるやや春の風

日記の中より　京都　四句　四月一日二日

旅に寒し春を時雨れの京にして
夷川通古道具屋　一句
永き日や動き已みたる整時板
加茂にわたす橋の多さよ春の風
北野天神
雀巣くふ石の華表や春の風

日記の中より　四月二十八日

姫百合に筒の古びやずんど切

猫の繪端書に　四月

戀猫の眼ばかりに瘠せにけり

藤の花の繪端書に

藤の花に古き四尺の風が吹く

西洋女優の繪端書に　六月二十八日

髪に眞珠肌あらはなる涼しさよ

障る事ありて或人の招飲を辭したる手紙のはしに　六月

時鳥厠半ばに出かねたり

八月武定亙口宛の端書より

のうぜんの花を數へて幾日影

手帳の中より　五十八句

看經の下は蓮池の戰かな

蓮剪りに行つたげな緣に僧を待つ

蓮に添へてぬめの白さよ漾虛集

白蓮に佛眠れり磬落ちて

生死事大蓮は開いて仕舞けり

ほの〳〵と舟押し出すや蓮の中

簑の下に雨の蓮を藏しけり

田の中に一坪咲いて窓の蓮

夕蓮に居士渡りけり石欄干

明くる夜や蓮を放れて二三尺

蓮の欄舟に鋏を渡しけり

蓮の葉に麩はとゞまりぬ鯉の色

石橋の穴や蓮ある向側

一八の家根をまはれば清水かな

したゝりは歯朶に飛び散る清水かな

寶丹のふたのみ光る清水かな

苔清水天下の胸を冷やしけり

ところてんの叩かれてゐる清水かな

底の石動いて見ゆる清水かな

二人して片足宛の清水かな

懸崖に立つ間したゝる清水哉

したゝりは襟をすくます清水かな

兩掛や關のこなたの苔清水

市に入る花賣憩ふ清水かな

樟の香や村のはづれの苔清水

澄みかゝる清水や小き足の跡

法印の法螺に蟹入る清水かな

追付て吾まづ掬ぶ清水かな

三どがさをまゝよとひたす清水かな

汗を吹く風は歯朶より清水かな

岩清水十戸の村の筧かな

山の温泉や欄に向へる鹿の面

ともし火を挑げて鹿の夜は幾時

芋の葉をごそつかせ去る鹿ならん

厠より鹿と覺しや鼻の息

山門や月に立つたる鹿の角

岩高く見たり牡鹿の角二尺

ひいと鳴いて岩を下るや鹿の尻
水淺く首を伏せけり月の鹿
かち渡る鹿や半ばに返り見る
見下して尾上に鹿のひとりかな
行燈に奈良の心地や鹿の聲
そゞろ寒の溫泉も三度目や鹿の聲
蕎麥太きもてなし振や鹿の聲
二三人砧も打ちぬ鹿の聲
郡長を泊めてたま〳〵鹿の聲
宵の鹿夜明の鹿や夢みじか
曉や消ぬべき月に鹿あはれ
寄りくるや豆腐の糟に奈良の鹿
秋の空鳥海山を仰ぎけり

雲少し榛名を出でぬ秋の空
橋立や松一筋に秋の空
朝貌の今や咲くらん空の色
抽んでゝ富士こそ見ゆれ秋の空
鱸釣つて舟を蘆間や秋の空
秋の空幾日仰いで京に着きぬ
押し分くる芒の上や秋の空
立つ秋の風にひかるよ蜘蛛の糸

八月二十日松根東洋城宛の端書より

問うて曰く　男女相惚の時什麼　漱
石子筆を机頭にころがして曰く天竺

に向つて去れ

讃　曰

春の水岩を抱いて流れけり

問うて曰く　相思の女男を捨てたる
時什麼　漱石子筆を机頭に竪立して
良久して曰く日々是好日

讃　曰

花落ちて碎けし影と流れけり

八月二十一日松根東洋城宛の端書より

心中するも三十棒
朝貌や惚れた女も二三日
心中せざるも三十棒

垣間見る芙蓉に露の傾きぬ
道へ道へすみやかに道へ
秋風や走狗を屠る市の中

手帳の中より　七句

恩給に事足る老の黄菊かな
菊に結へる四つ目の垣もまだ青し
端溪に菊一輪の机かな
杉垣に畫をこぼれて百日紅
酸多き胃を患ひてや秋の雨
大鼓芙蓉の雨にくれ易し
後仕手の撞木や秋の橋掛り

祝滿洲日々新聞發刊　十月八日

朝日のつと千里の黍に上りけり

手帳の中より　十七句

露けさの庵を繞りて芙蓉かな

露けさの中に歸るや小提灯

かりがねの斜に渡る帆綱かな

雁や渡る乳玻璃に細き灯を護る

北窓は鎖さで居たり月の雁

傾城に鳴くは故郷の雁ならん

夕雁や物荷ひ行く肩の上

灯を入るゝ軒行燈や雁低し

帆柱をかすれて月の雁の影

客となつて澤國に雁の鳴く事多し

遠近の砧に雁の落るなり

提灯に雁落つらしも闇の畦

花びらの狂ひや菊の旗日和

侘住居作らぬ菊を憐めり

白菊や書院へ通る腰のもの

草庵の垣にひまある黄菊かな

旗一竿菊のなかなる主人かな

『虞美人草』切抜帖の終に　十月二十九日

秋の蚊の鳴かずなりたる書齋かな

手帳の中より　十一句

黒塀にあたるや妹が雪礫
女の童に小冠者一人や雪礫
茶の花や黄檗山を出でゝ里餘
丸髷に結ふや咲く梅紅に
むら鴉何に集る枯野かな
川ありて遂に渡れぬ枯野かな
法螺の音の何處より來る枯野哉
たゝむ傘に雪の重みや湯屋の門

吾影の吹かれて長き枯野かな
女うつ鼓なるらし春の宵
白絹に梅紅ゐの女院かな

十二月十六日小宮豐隆宛の端書の中より

文債に籠る冬の日短かゝり

明治四十年頃

草共に桔梗を垣に結ひ込みぬ
白桔梗古き位牌にすがゝし
草刈の籠の目を洩る桔梗かな

桔梗活けて寶生流の指南かな

扶け起す萩の下より鼬かな

ふき易へて萱に聽きけり秋の雨

藁葺に移れば一夜秋の雨

明治四十一年

祝傳四新婚　二月

日毎踏む草芳しや二人連

二月二十四日高濱虚子宛の端書の中より

鼓打ちに參る早稲田や梅の宵

手帳の中より　二十九句

青柳擬寶珠の上に垂るゝなり

居士が家を柳此頃藏したり

門に立てば酒乞ふ人や帽に花

鶯の日毎巧みに日は延びぬ
吾に媚ぶる鶯の今日も高音かな

勅額の霞みて松の間かな
飯蛸の一かたまりや皿の藍
飯蛸や膳の前なる三保の松
飯蛸と侮りそ足は八つあるを

春の水たるむはづなを濡しけり

連翹に小雨來るや八つ時分
花曇り尾上の鐘の響かな
籠の鳥に餌をやる頃や水温む

山伏の關所へかゝる櫻かな
強力の笈に散る櫻かな
南天に寸の重みや春の雪

眞蒼な木賊の色や冴返る
そゝのかす女の眉や春淺し
鹽辛を壺に探るや春淺し
名物の椀の蜆や春淺し
僧となつて鐘を撞いたら冴返る
（後に）蜆の椀に
穴のある錢が袂に暮の春
いつか溜る文殼結ふや暮の春

逝く春や庵主の留守の懸瓢
嫁がぬを日に白粉や春惜む

垢つきし赤き手絡や春惜む

春惜む人にしきりに訪はれけり　（後に）屢

春色到吾家

おくれたる一本櫻憐なり

南風故國情

逝く春やそゞろに捨てし草の庵

啓　新春夏秋冬のうち春の部御脱稿のよし奉賀候。一句入御覧候。

青柳の日に綠なり句を選む

六月三日松根東洋城宛の手紙の中より

短夜を交す言葉もなかりけり

手帳の中より　三句　六月

天生目一治氏細君の病氣の爲に名流俳句談を草して之を賣りて藥餌の料となさんとす。書肆余が題句あらば出版すと云ふ。天生目氏自ら來つて句を乞ふ。

文を賣つて藥に代ふる蚊遣哉

森次太郎氏夫人郷里にて男兒を擧ぐ一句を祝へと云ふ

安產と涼しき風の音信哉

二人寐の蚊帳も程なく狹からん

悼亡　松根東洋城より文鳥の死を報じ來れるに返して　六月三十日

青梅や空しき籠に雨の糸

六月三十日高濱虚子宛の端書の中より

五月雨や主と言はれし御月並

七月一日高濱虚子宛の手紙の中より

鮟鱇や小光が鍋にちんちろり

七月二十七日村上霽月宛の手紙の中より

まのあたり精霊來り筆の先

猫の墓に　九月

此の下に稲妻起る宵あらん

明治四十一年頃

屑買の垣より呼べば蝶黄なり

明治四十二年

空間を研究せる天然居士の肖像に題す　四月七日

空に消ゆる鐸の響や春の塔

麻の夜着を腹の上に掛けて、仰向に合掌してゐる所へ東洋城が來て、新春夏秋冬の秋の部の序を書けと逼る。病氣だから序は書けないよ、と云つて一句を口吟む。八月二十六日

初秋の芭蕉動きぬ枕元

春はものゝ句になり易し京の町

日記の中より　滿韓旅行　十二句　九月十月

手を分つ古き都や鶉鳴く

熊岳城にて

黍遠し河原の風呂へ渡る人

黍行けば黍の向うに入る日かな

草盡きて松に入りけり秋の風

馬車にて支那人の鞭の音をきく

鞭鳴らす頭の上や星月夜

水青くして平なり。赤土と青松の小きを見る。

なつかしき土の臭や松の秋

畫賛

負ふ草に夕立早く逼るなり

高麗人の冠を吹くや秋の風

韓人は白し

秋の山に逢ふや白衣の人にのみ

秋晴や峯の上なる一つ松

動かざる一篁や秋の村

歸り見れば蕎麥まだ白き稻みのる

明治四十三年

畫　　賛　三月

御堂まで一里あまりの霞かな

虞美人草畫賛　七月

花びらに風薫りては散らんとす

日記の中より　修善寺温泉　八月―十月

不圖搖れる蚊帳の釣手や今朝の秋

秋の思池を回れば魚躍る

宮方の御立のあとや温泉の秋

尺八を秋のすさびや欄の人

温泉の村に弘法様の花火かな

別るゝや夢一筋の天の川

秋の江に打ち込む杭の響かな

秋風や唐紅の咽喉佛

秋晴寐ながら空を見る。ひげをそる。

秋晴に病閉あるや髭を剃る

秋の空淺黄に澄めり杉に斧

よすがらの雨

衰に夜寒逼るや雨の音

旅にやむ夜寒心や世は情

一夜眠さめて枕頭に二三子を見る　一句

蕭々の雨と聞くらん宵の伽

秋風やひじの入りたる胃の袋

風流の昔戀しき紙衣かな

二兄皆早く死す。死する時一本の白髪なし。余の兩鬢漸く白からんとして、又一縷の命をつなぐ。

生殘る吾恥かしや鬢の霜

立秋の紺落ち付くや伊豫絣

骨立を吹けば疾む身に野分かな

今朝髪をけづる

稍寒の鏡もなくに櫛る

昨夜主人鯛一尾を贈る。氷嚢を取り去れる祝心にや。

鯛切れば鱗眼を射る稍寒み

病む日又簾の隙より秋の蝶

病んでより白萩に露の繁く降る事よ

蜻蛉の夢や幾度杭の先

蜻蛉や留り損ねて羽の光

取り留むる命も細き薄かな

佛より痩せて哀れや曼珠沙華

蟲遠近病む夜ぞ靜なる心

餘所心三味聞きゐればそゞろ寒

月を亙るわがいたつき・や旅に菊

起きもならぬわが枕邊や菊を待つ

嬉しい。生を九仞に失つて命を一簣

につなぎ得たるは嬉しい。

生き返るわれ嬉しさよ菊の秋

たそがれに參れと菊の御使ひ

昨雨を聞く。夜もやまず。一句

範頼の墓も濡るらん秋の雨

菊作り門札見れば左京かな

病後對鏡 一句

洪水のあとに色なき茄子かな

菜の花の中の小家や桃一木

秋淺き樓に一人や小雨がち

生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉

鶴の影穂蓼に長き入日かな

一山や秋色々の竹の色

宮本氏云ふ今二週間にて歸京し得べし。まづ二十日と見れば可ならんと。診斷の結果なり。同氏は杉本氏と午頃歸る。坂元も同時に歸る。一句

古里に歸るは嬉し菊の頃

靜なる病に秋の空晴れたり

菊の宴に心利きたる下部かな

午後一時楚人冠去る

大切に秋を守れと去りにけり

始めて床の上に起き上りて坐りたる時今迄横にのみ見たる世界が竪に見えて新らしき心地なり　二句

竪に見て事珍らしや秋の山

坐して見る天下の秋も二た月目

寐られぬ夜

とも し置いて室明き夜の長かな

三人觀音様より歸る。堂守から菊を乞うて來る。一句

堂守に菊乞ひ得たる小錢かな

力なや痩せたる吾に秋の粥

住き竹に吾名を刻む日長かな

見もて行く蘇氏の印譜や竹の露

籠賴の墓守も花を作るから今度はあすこで貰つてくるといふ

秋草を仕立てつ墓を守る身かな

秋の蚊の螫さんとすなり夜明方

賴家の昔も嘸栗の味

鮎の丈日に延びつらん病んでより

肌寒をかこつも君の情かな

桔梗、菊、紫苑、桔梗は濃くふつくらしたり。紫苑は高く大きく薄紫の菊の婆娑たるに似たり。

貧しからぬ秋の便りや枕元

京に歸る日も近付いて黄菊哉

稲の香や月改まる病心地

明方戸を明ける時の心持

天の河消ゆるか夢の覺束な

始めて百舌をきく　一句

裏座敷林に近き百舌の聲

歸るは嬉し梧桐の未だ青きうち

歸るべくて歸らぬ吾に月今宵

陰。秋かと思へば夏の末、夏の末か

と思へば秋。柿も大分赤き由。栗もとうから出てゐる。稲は半分黄くと。

雲を洩る日ざしも薄き一葉哉

殘骸猶春を盛るに堪へたりと前書して　二句

蹇へる我は夜長に少しづゝ

骨の上に春滴るや粥の味

鶺鴒多き所なり　一句

鶺鴒や小松の枝に白き糞

寐てゐれば栗に鶉の興もなく

氣管支にて體を拭く事を禁ぜられたれば觸るとざら〳〵して人間の肌とは覺えず。鷄の羽を引きたる如し。

粟の如き肌を切に守る身かな

冷やかな瓦を鳥の遠近す

快晴心地よし。昨夜眠穩。

冷かや人寐靜まり水の音

昨日森成さん畠山入道とかの城跡へ行つて歸りにあけびといふものを取つてくる。ぼけ茄子の小さいのが葡萄のつるになつてゐる樣こうまいよし。女郎花と野菊を澤山取つてくる。蕗黄に花青く普通にあらず。野菊が砂壁に映りて暗き所に星の如く簇がる。

的皪と壁に野菊を照し見る

鳥つゝいて半うつろのあけび哉

朝寒や太鼓に痛き五十棒

雨濛々。朝食。床の上に起き返りて庭を眺めると殘紅をかすかに着けながら、百日紅が既に黄に染つてゐる。

先づ黄なる百日紅に小雨かな

昨日看護婦が裏の縁側に出てもうあの柚が黄になりましたと云ふ。明後日は東京へ歸る日取なり。

いたつきも久しくなりぬ柚は黄に

足腰の立たぬ案山子を車かな
骨許りになりて案山子の浮世かな

日記の中より　胃腸病院　十月十二日―十一月十五日

昨日途中にて　八句

病んで來り病んで去る吾に案山子哉
濡るゝ松の間に蕎麥を見付たる
藪陰や濡れて立つ鳥蕎麥の花
稻熟し人癒えて去るや温泉の村
柿紅葉せり纏はる蔦の青き哉
就中竹綠ゝ秋の村
數ふべく大きな芋の葉なりけり
新らしき命に秋の古きかな

……初め余の森成さんを迎へたる時、院長はわざ〳〵電報で、其地にて充分看護せよと電報をかけたり。治療を受けた余は未だ生きてあり治療を命じたる人は既に死す。驚くべし。

逝く人に留まる人に來る雁
雞頭に後れず或夜月の雁
釣臺に野菊も見えぬ桐油哉
思ひけり既に幾夜の蟋蟀

病院でも朝五時頃になると太鼓の聲

が聞える。始めて聞いた時は恍惚のうちに修善寺に居た様な心持がした。

過ぎし秋を夢みよと打ち覺めよとうつ

昨服部より銀の莨入を取り寄せて見る。森成さんと相談の上、光澤けしの小さい奴を擇びそれに修善寺にて森成國手へと前書して

朝寒も夜寒も人の情かな

森成君に病氣前の寫眞を望まれて一句を題す

顧みる我面影やすでに秋

曉や夢のこなたに淡き月

嬉しく思ふ蹴鞠の如き菊の影

肩に來て人懷かしや赤蜻蛉

謎柿も熟れて王維の詩集哉

晴。夜十時、三時十五分前に目醒む。

兩度共小便。

つく〳〵と行燈の夜の長さかな

小行燈夜半の秋こそ古めけり

一叢の薄に風の强き哉

雨多き今年と案山子聞くからに

柿一つ枝に殘りて烏哉

一等患者三名のうち二名死して余獨り生存す。運命の不思議な事を思ひ、

上の句あり。

寅彦のヴイオリンの事を考へ出して

君が琴塵を拂へば鳴る秋か

緣に上す君が遺愛の白き菊

身體を拭き爪を剪る

形ばかりの浴す菊の二日哉

三日の菊雨と變るや昨夕より

菊の鉢は夜見る方よし

燭し見るは白き菊なれば明らさま

藏澤の竹を得てより露の庵

床の中で楠緒子さんの爲に手向の句を作る　一句

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

ひたすらに石を除くれば春の水

たゞ一羽來る夜ありけり月の雁

無花果や竿に草紙を緣の先

屠牛場の屋根なき門や夏木立

勾欄の擬寶珠に一つ蜻蛉哉

冷かな文箱差出す蒔繪かな

冷かな足と思ひぬ病んでより

冷やかに觸れても見たる擬寶珠哉

冷やかに抱いて琴の古きかな

提灯を冷やかに提げ芒かな

白菊と黄菊と咲いて日本かな

菊の香や幾鉢置いて南縁

生垣の隙より菊の澁谷かな

暖簾に藝人の名を茶屋の菊

青山に移りていつか菊の主

榻置いて菊あるところどころかな

明治四十三年頃

なに食はぬ和尚の顔や河豚汁

謠曲藤戸

浦の男に淺瀬問ひ居る朧哉

明治四十四年

一人居や思ふ事なき三ケ日

畫賛

蝶去つて又蹲踞る小猫かな

四月

棗駝して石を除くれば春の水

鷄の尾を午頃吹くや春の風

八月十四日和歌の浦にて

涼しさや蚊帳の中より和歌の浦

起きぬ間に露石去にけり今朝の秋

病中露石子の訪問を受けて逢はず後より此句を贈る　大阪湯川病院病中　九月

大阪湯川病院病中　九月八日寺田寅彦宛の端書の中より

蝙蝠の宵々毎や薄き粥

稲妻の（後に）

大阪湯川病院病中　九月

稲妻に近くて眠安からず

病院にて　九月十四日松根東洋城宛の端書の中より

灯を消せば涼しき星や窓に入る

九月二十日寺田寅彦宛の端書の中より

風折々萩先づ散つて芒哉

九月二十五日松根東洋城宛の手紙の中より

耳の底の腫物を打つや秋の雨

切口に冷やかな風の厠より

十月二十一日松根東洋城宛の端書の中より

たのまれて戒名選む雞頭かな

十一月

抱一の芒に月の圓かなる

明治四十五年
大正元年

自畫賛 五月二十六日

雪の夜や佐野にて食ひし栗の飯

壁句 六月十七日

壁隣り秋稍更けしよしみの灯

懸物の軸だけ落ちて壁の秋

行く春や壁にかたみの水彩畫

壁に達磨それも墨繪の芒かな

如意拂子懸けてぞ冬を庵の壁

錦繪や壁に寂びたる江戸の春

鼠もや出ると夜寒に壁の穴

壁に脊を涼しからんの裸かな

壁に映る芭蕉夢かや戰ぐ音

壁一重隣に聽いて砧かな

四十五年夏頃

水盤に雲呼ぶ石の影すゞし

鹽原にて　八月

湯壺から首丈出せば野菊哉

自畫賛　八月

五六本なれど靡けばすゝき哉

上林にて　八月

蚊帳越しに見る山青し杉木立

奉悼　九月八日松根東洋城宛の手紙の中より

おかくれになつたあとから鶏頭哉

奉送　同前

嚴かに松明振り行くや星月夜

九月二十八日夜松根東洋城宛の手紙の中より

かりそめの病なれども朝寒み

手帳の中より　四句

車上にて「痔を切つて入院の時」の句を作る　十月五日

秋風や屠られに行く牛の尻

杉木立寺を藏して時雨けり

豆腐燒く串にはら〳〵時雨哉

琴作る桐の香や春の雨

大正二年

秋頃

菊一本畫いて君の佳節哉

自畫贊 大正二年頃

四五本の竹をあつめて月夜哉

自畫贊 大正二年頃

萩の粥月待つ庵となりにけり

大正三年

岩崎太郎次氏のために　一月

播州へ短冊やるや今朝の春

松立てゝ門鎖したる隱者哉

内田榮造のために　一月

春の發句よき短冊に書いてやりぬ

手帳の中より　百十四句

冠を挂けて柳の綠哉

鶯は隣へ逃げて藪つゞき

つれ〴〵を琴にわびしや春の雨

欄干に倚れば下から乙鳥哉

我一人行く野の末や秋の空

内陣に佛の光る寒哉

春水や草をひたして一二寸

繩暖簾くゞりて出れば柳哉

橋杭に小さき渦や春の川

同じ橋三たび渡りぬ春の宵

蘭の香や亞字欄渡る春の風

岡榮一郎句を索む　一句

竹藪の青きに梅の主人哉

茶の木二三本閑庭にちよと春日哉

日は永し一人居に静かなる思ひ

世に遠き心ひまある日永哉

線香のこぼれて白き日永哉

留守居して目出度思ひ庫裏長閑

我一人松下に寐たる日永哉

引かゝる護謨風船や柳の木

門前を彼岸参りや雪駄ばき

そゞろ歩きもはなだの裾や春の宵

春風に吹かれ心地や温泉の戻り

仕立もの持て行く家や雛の宵

長閑さや垣の外行く藥賣

竹の垣結んで春の庵哉

玉碗に茗甘なふや梅の宿

草双紙探す土藏や春の雨

桶の尻干したる垣に春日哉

誰袖や待合らしき春の雨

錦繪に此春雨や八代目

京樂の水注買ふや春の町

萬歳も乘りたる春の渡し哉

春の夜や妻に敎はる荻江節

木蓮に夢の様なる小雨哉

降るとしも見えぬに花の雫哉

春雨や京菜の尻の濡るゝ程

落椿重なり合ひて涅槃哉

木蓮と覺しき花に月朧

永き日や頼まれて留守居してゐれば

木瓜の實や寺は黄檗僧は唐

春寒し未だ狐の裘

寺町や垣の隙より桃の花

見連に揃の響土間の春

染物も柳も吹かれ春の風

連翹の奥や碁を打つ石の音

春の顔眞白に歌舞伎役者哉

小座敷の一中は誰梅に月

花曇り御八つに食ふは團子哉

爐塞いで窓に一鳥の影を見る

寺町や椿の花に春の雪

賣茶翁花に隠るゝ身なりけり

高き花見上げて過ぎぬ角屋敷

塗笠に遠き河内路霞みけり

窓に入るは目白の八つか花曇

靜かなるは春の雨にて釜の音

驢に騎して客來る門の柳哉
見上ぐれば坂の上なる柳哉
經政の琵琶に御室の朧かな
樓門に上れば帽に春の風
千社札貼る樓門の櫻哉
家形船着く棧橋の柳哉
芝草や陽炎ふひまを犬の夢
早蕨の拳伸び行く日永哉
陽炎や百歩の園に我立てり
園　中一句
ちら〳〵と陽炎立ちぬ猫の塚

紙雛つるして枝垂櫻哉
行く春や披露待たるゝ歌の選
眠る山眠たき窓の向う哉
魚の影底にしば〳〵春の水
四つ目垣茶室も見えて辛夷哉
祥瑞を持てこさせ縁に辛夷哉
如意の銘彫る僧に木瓜の盛哉
馬を船に乗せて柳の渡哉
田樂や花散る里に招かれて
行春や僧都のかきし繪卷物

行春や書は道風の綾地切

藁打てば藁に落ちくる椿哉

静坐聽くは虚堂に春の雨の音

良寛にまりをつかせん日永哉

一張の琴（後に）毛毬鳴らし見る落花哉

春の夜や金の無心に小提灯

局に閑あり静かに下す春の石

春深き里にて隣り梭の音

銀屏に墨もて梅の春寒し

三味線に呀えたる撥の春淺し

海見ゆる高どのにして春淺し

白き皿に繪の具を溶けば春淺し

筍は鑵詰ならん淺き春

行く春のはたごに畫師の夫婦哉

行く春や經納めにと嚴島

行く春や知らざるひまに頰の髭

鶯や髪剃あてゝ貰ひ居る

活けて見る光琳の畫の椿哉

飯食へばまぶた重たき椿哉

行春や里へ去なする妻の駕籠

酒の燗此頃春の寒き哉

皓き歯に酢貝の味や春寒し

嫁の傘傾く土手や春の風

春惜む日ありて尼の木魚哉

業終へぬ寫經の事や盡くる春

春惜む茶に正客の和尚哉

冠に花散り來る羯鼓哉

門鎖ざす王維の庵や盡くる春

春惜む句をめい〳〵に作りけり

枳殼の芽を吹く垣や春惜む

鎌倉へ下る日春の惜しき哉

新坊主やそゞろ心に暮るゝ春

桃の花隱れ家なるに吠ゆる犬

草庵や蘆屋の釜に暮るゝ春

牽舟の綱のたるみや乙鳥

三河屋へひらりと這入る乙鳥哉

呑口に乙鳥の糞も酒屋哉

鍋提げて若葉の谷へ下りけり

料理屋の塀から垂れて柳かな

十月二十日松根東洋城宛の手紙の中より　四句

酒少し德利の底に夜寒哉

酒少し参りて寐たる夜寒哉

眠らざる夜半の灯や秋の雨

電燈を二燭に易へる夜長哉

わが犬のために　十月三十一日

秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ

大正四年

畫賛　四月五日

眞向に坐りて見れど猫の戀

四月京都にて　八句

柳芽を吹いて四條のはたごかな

見あぐれば坂の上なる柳哉

筋違に四條の橋や春の川

紅梅や舞の地を彈く金之助

木屋町に宿をとりて川向の御多佳さんに

春の川を隔てゝ男女哉

畫賛

萱草の一輪咲きぬ草の中

自畫賛

牡丹剪つて一草亭を待つ日哉

自畫賛

椿とも見えぬ花かな夕曇

畫賛　五月十二日

白牡丹李白が顔に崩れけり

自畫賛　十一月

竹一本葉四五枚に冬近し

静江さんに　十二月二十六日

女の子十になりけり梅の花

大正五年

春

春風や故人に贈る九花蘭

手帳の中より　大正五年頃　十五句

白梅にしぶきかゝるや水車

孟宗の根を行く春の筧哉

梅早く咲いて温泉の出る小村哉

いち早き梅を見付けぬ竹の間

梅咲くや日の旗立つる草の戸に

裏山に蜜柑みのるや長者振

温泉に信濃の客や春を待つ

橙も黄色になりぬ温泉の流

鶯に聞き入る茶屋の床几哉

鶯や草鞋を易ふる峠茶屋

鶯や竹の根方に鍬の尻

鶯や藪くゞり行く蓑一つ

鶯を聽いてゐるなり縫箔屋

鶯に餌をやる寮の妾かな

温泉の里橙山の麓かな

手帳の中より　大正五年頃　十六句

桃の花家に唐畫を藏しけり

桃咲くやいまだに流行る漢方醫

輿に乘るは歸化の僧らし桃の花

町儒者の玄關構や桃の花

かりにする寺小屋なれど梅の花

文も候稚子に持たせて桃の花

琵琶法師召されて春の夜なりけり

春雨や身をすり寄せて一つ傘

鶯を飼ひて床屋の主人哉

耳の穴掘つて貰ひぬ春の風

嫁の里向うに見えて春の川

岡持の傘にあまりて春の雨

一燈の青幾更ぞ瓶の梅

病める人枕に倚れば瓶の梅

梅活けて聊かなれど手習す

桃に琴彈くは心越禪師哉

畫　贊九月

秋立つ日猫の蚤取眼かな

畫　贊九月

秋となれば竹もかくなり俳諧師

九月二日芥川龍之介宛の手紙の中より

秋立つや一卷の書の讀み殘し

畫　贊　九月八日

蝸牛や五月をわたるふきの莖

畫　贊同前

朝貌にまつはられてや芒の穗

畫　贊同前

萩と齒朶に贊書く月の團居哉

自畫贊同前

棕梠竹や月に背いて影二本

禪僧二人を宿して　十月

風呂吹きや頭の丸き影二つ

網得魚蝦春水清　畫贊　十月

煮て食ふかはた燒いてくふか春の魚

春風未到意先到　自畫贊　十一月

いたづらに書きたるものを梅とこそ

十一月十日鬼村元成宛の手紙の中より

まきを割るかはた祖を割るか秋の空

十一月十五日富澤敬道宛の手紙の中より　五句

饅頭に禮拜すれば晴れて秋

饅頭は食つたと雁に言傳てよ

徳山の故事を思ひ出して　一句

吾心點じ了りぬ正に秋

僧のくれし此饅頭の丸きかな

瓢箪はどうしました

瓢箪は鳴るか鳴らぬか秋の風

年月不詳

畫賛

ひとむらの芒動いて立つ秋か

畫賛

歸り路は鞭も鳴さぬ日永かな

畫賛

吾猫も虎にやならん秋の風

17654

大正十三年六月一日印刷
大正十三年六月五日發行

漱石全集第十卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所　三秀舍
東京市神田區美土代町二丁目一番地

（岡山製本）

7204
1

圖書館藏書
入庫 12.10.27.